

飛鳥の考古学—解明すすむ「日本国」誕生の舞台—

2017.11.25 木下正史

A、飛鳥・藤原京の時代—文明開化の時代—

- 1、飛鳥・藤原京の時代：推古天皇、豊浦宮で即位(592年)～元明天皇の平城京遷都(710年)までの約120年間。歴代天皇は、飛鳥とその周辺に宮都を営む。
 - 1) 孝徳天皇の難波宮遷都(645～654年)、天智天皇の近江大津宮遷都(667～672年)：宮都は飛鳥を離れるが、再び飛鳥へと戻る。
 - 2) 飛鳥・藤原の地：政治・文化の中心地であり続ける。→「飛鳥・藤原京の時代」。
 - 3) 飛鳥・藤原の歴史空間：一体的な歴史を歩んだ地域。→飛鳥盆地内だけではない
 - ①広域：飛鳥盆地と西北方の平地、西南方の丘陵地を含む南北8km、東西6km以上。
- 2、日本史上大きな画期：政治、社会、宗教、文化の大きな転換期。飛躍の時代。
 - 1) 3世紀～6世紀後半：「前方後円墳の時代」。各地の豪族による連合国家の時代。
 - ①連合国家の呼名：古代中国や諸国に対して「倭国」と名乗る。
 - 2) 飛鳥・藤原京の時代：天皇を頂点とする律令制による中央集権的な統一国家(本格的な国家)を作り上げていった時代。
 - ①新しい中央集権国家：唐を中心とした東アジア社会に対して「日本国」と名乗る。
 - ②最高統治者の呼称：「大王(おびきみ)」から「天皇」と名乗るようになる。
- 3、統一国家「日本国」を築きあげていく過程：様々の変革が飛鳥・藤原の地で始まる。
 - 1) 飛鳥浄御原令・大宝律令(初の体系法典)の制定：法治国家へ。
 - 2) 中央官制の整備：六官制・二官八省制の政治機構、官僚制・官位制を整備。
 - 3) 京と地方の国郡(評)里の行政区分や、都と地方を結ぶ交通・通信網を整備。
 - ①戸籍が作られ、班田制・税制を整備。
 - 4) 暦・時刻制、度量衡制、貨幣制(富本銭・和同開珎の発行)などを整備。
 - 5) 仏教・道教・儒教思想を導入し展開：
 - 6) 中国系の最先端の科学や技術、芸術：積極的に導入。大きく展開。
 - ①建築・測量技術、水道・噴水技術、造仏、寺院や古墳の壁画など：
 - ②医療・医薬、衣食住：漢法を取り入れ中国風に整えられる。粉食、油脂、乳製品
 - 7) 『古事記』や『日本書紀』など歴史書編纂が本格化：
 - 8) 変革の到達点：大宝律令が制定され、初めて大陸様式の本格的宮殿・藤原宮が建設され、古代中国の都の制度にならった政治都市・都城が作りあげられる。
- 4、飛鳥時代の区分：乙巳の変(645年)での蘇我氏滅亡を境に、前期と後期に区分。
 - 1) 『日本書紀』編者が描く大化改新：社会が新たな段階に入ったことを示す。
 - 2) 大化2年(646)3月の薄葬令：『魏志』武帝紀などを引用しながら、大きな古墳を作ること、多くの副葬品を納めることは「愚俗」であり、こうした愚かな「旧俗」を一切やめるよう命じる。
 - ①国家を作りあげるには：古墳造営という「古い愚俗」を棄てて、「文明化」という社会全体の体質的な変革が必要だという。
 - ②飛鳥時代をどう理解すべきかを、我々に教えてくれる。
 - ③前方後円墳：築造を停止。方墳・八角形墳を採用。小規模化。古墳文化は後退。
 - 3) 古墳時代から飛鳥時代へ：明治の文明開化にたとえられる文明開化を成し遂げていった時代。明治期と並ぶ日本史上の二大変革の時代。
 - 4) 飛鳥木簡：大化改新詔を再評価。7世紀後半の早期からの行政改革の進展を示す

B、「日本国」を作りあげ、飛鳥の新文化を育んだ原動力

- 1、原動力：隋唐、百済・高句麗・新羅など東アジア諸国との濃密な交流。
 - 1) 長年の交流：積極的に進める。先進の政治・社会制度・宗教・文化・技術を導入
 - 2) 東アジア社会との交流：いくつかの画期がある。

- ①5世紀後半以来：朝鮮半島の百済・高句麗・新羅・伽耶から多くの人々が渡来。飛鳥周辺などに集住。東漢氏や西漢氏。先進の知識・思想・技術を伝え、担う
- ②6世紀頃：新知識・技術を身につけた「今來の漢人」が次々渡来。王辰爾一族など
- 3) 5～7世紀：百済と濃密に交流。先進知識・技術、仏教や道教などが伝えられる。
 - ①初期の僧尼：百済や高句麗からの渡来僧や、渡来人出身者が中核。
 - ②飛鳥寺造営：百済から造寺工・瓦工などが派遣され、東漢氏系工人が造営に参画(a)鞍作止利：飛鳥大仏、法隆寺金堂本尊釈迦三尊像を鋳造。
 - ③百済大寺大匠(書直県)、東大寺大仏師(国中公麻呂)、富本銭鋳造(黄文本実)。
- 4) 7世紀初頭以来：遣隋使・遣唐使を派遣。
 - ①推古朝に派遣された留学生・留学僧：長安で数10年間の留学生生活を終え、隋唐の最先端の政治・社会制度、思想・知識、技術を身につけて帰国。
 - ②留学生達：乙巳の変後の新しい政治、新文化の形成に大きく寄与。
 - ③留学生・留学僧：渡来系の人々を中心に。高向玄理・僧旻・南淵請安など。
- 5) 百済滅亡(661年)後：百済の政権を担っていた貴族層が大挙して亡命。
 - ①亡命者：天智朝以降、政治、学術、教育面などで大きく貢献。
- 6) 列島社会：百済や隋唐から圧倒的な影響を受けながらも、伝統を大切にしながらとの融合をはかりつつ、独自の国の体制や個性豊かな文化を育んでいく。
 - ①7世紀後半以降：文化の和風化が顕著になる。白鳳文化が開花。
 - ②柿本人麻呂など宮廷歌人の万葉歌：世界に冠たる文学作品を生み出す。
- 7) 平城京遷都後：天皇や貴族はたびたび飛鳥の地を訪れ、「明日香の旧き都」「故郷の飛鳥」「古京」と詠む。飛鳥は父祖の地、文化の原点、懐旧の故郷。
- 8) この時代に達成された多くの事柄：今日に引き継がれている。私達の源流。
 - ①日本国号・天皇称号、元号、官制、国郡制、道路、万葉仮名など。

2、飛鳥が宮都の地となった要因：蘇我氏の役割が多。

- 1) 推古天皇：蘇我氏の血筋。父は欽明天皇、母は蘇我稲目の娘堅塩媛。馬子は叔父
- 2) 蘇我氏：6世紀中頃～7世紀中頃、稲目・馬子・蝦夷・入鹿が権勢を誇る。
 - ①国家形成の揺籃期：政治・経済・文化・宗教など多方面で活躍。主役を演ずる。
 - ②屯倉の経営：新しい管理運営方式を採用。朝廷の経済基盤を整え、高める。
 - ③百済との外交を推進：仏教を積極的に受容。最初の本格的寺院・飛鳥寺を建立。
- 3) 蘇我氏の飛鳥進出：先進的な渡来人を傘下に置きつつ、曾我川周辺から甘樫丘北方一帯へ、さらに飛鳥盆地内へと拠点を拡大。勢力を巨大化させていく。
- 4) 蘇我馬子：蘇我氏の権力を飛躍させ、天皇の存廃を左右するなど権勢を奮う。
 - ①崇峻元年(588)：馬子は物部守屋と戦い、物部を滅ぼして絶大の権力を握る。
 - ②戦勝を記念して：飛鳥盆地の真中に日本最初の本格的寺院・飛鳥寺を建立。
 - ③飛鳥寺：飛鳥盆地内最初の本格的施設。飛鳥時代の幕開けを告げる大記念物。
- 5) 豊浦の地：稲目の向原家の伝承地、蘇我蝦夷の豊浦家の地。伝統的な拠点の地。
 - ①飛鳥寺の造営中：伝統的拠点の豊浦に、豊浦宮を営み推古天皇が即位。
- 6) 蘇我馬子：豊浦宮への遷宮を主導。こうして飛鳥時代の扉が開かれる。

3、吉備と蘇我氏、白猪史：

- 1) 欽明天皇：蘇我稲目・馬子に命じて吉備に白猪屯倉・兎島屯倉を設置させる。
 - ①欽明16年(555)7月：稲目らを遣わして吉備の五郡に白猪屯倉を設置。
 - ②欽明17年7月：稲目らを備前兎島郡に遣わして屯倉を設置。葛城山田直瑞子を田令(たかみ)とする。
 - ③欽明30年(569)正月：肝津(いづ)を遣して白猪屯倉の田部の戸籍を作り直させる。
 - ④欽明30年4月：肝津は任務を果たし、田戸を編成。天皇は肝津に白猪姓(白猪史の祖)を賜り、田令に任じて瑞子の副官とする。
 - ⑤王辰爾一族：百済系。新知識・技術によって大きく貢献。肝津は王辰爾の甥。
 - ⑥敏達3年(574)10月：馬子を吉備国に遣わし、白猪屯倉と田部を拡張させ、田部の

名籍を白猪史肝津に授け、管理させる。

- 2) 白猪屯倉：中央から田令を派遣して直接経営。田部を名籍(戸籍)に編成して新しい屯倉経営方式を採用。蘇我稲目・馬子が推進。
- 3) 飛鳥池遺跡：備中国加夜(加夜)評からの荷札木簡が出土。加夜評から飛鳥池工房に出仕した仕丁(金属器製作工人)の養米が送られる。
- 4) 「備中国大税負死亡人帳」(天平11年=739年)：
 - ①漢人系の渡来人：都宇郡建部郷、賀夜郡庭瀬郷・大井郷・阿蘇郷に多く住む。
 - ②賀夜郡阿蘇郷：宗部里に「西漢人部麻呂」、磐原里に「史戸阿遲麻佐」「西漢人部事元亮」が住む。→加夜評に塞課部里(宗部里)がある。
 - ③賀夜郡庭瀬郷三宅里：「忍海漢部真麻呂」(葛城の渡来系鉄器製作工人)が住む。
 - ④賀夜郡大井郷粟井里：賀夜郡阿蘇郷の東隣。「東漢人部刀良手」が住む。
 - ⑤平城宮出土木簡：「備中国賀夜郡口口口口鉄一連」・「大井鉄十口」。
- 5) 総社市窪木薬師遺跡、奥坂遺跡群(千引カナク口谷遺跡ほか)：鉄・鉄器生産遺跡
 - ①窪木薬師遺跡：5世紀前半に鉄器生産開始。6世紀中頃に再度、活発化。
 - ②奥坂遺跡群：6世紀後半～8世紀前半の製鉄遺跡。賀夜郡阿蘇郷に属する。
 - ③加夜郡(評)：鉄資源に恵まれ、漢人系工人が多く分布。
- 6) 鉄・鉄器生産：備前・美作には秦氏系や白猪氏、備中には漢氏系工人が多く分布
- 7) 「忍海漢部」：葛城の工人。5世紀後半に葛城氏が衰退した後、蘇我氏が掌握。
- 8) 吉備の渡来系工人の分布：白猪屯倉の設置と関係。蘇我氏が関与。
 - ①兎島屯倉：製塩と関係。須恵郷に「宗我部赤羽」・「宗我部人足」が居住。

C、飛鳥・藤原京(新益京)の諸遺跡

- 1、飛鳥・藤原地域：「日本国」が作り上げられていく過程を物語る宮殿、庭園、祭祀施設、官衙、邸宅、寺院、陵墓・古墳など様々の性格の遺跡・遺物が地下に埋もれている。諸遺跡など相互に深く関わりながら変遷。
 - 1) 飛鳥・藤原の地：面的に隙き間なくつながる。どこを発掘しても遺構を発見。いく層にも重層。狭い谷間や丘陵地に及ぶ。一つの巨大遺跡。
 - 2) 『日本書紀』などに記された宮殿・寺院・陵墓の名：それらに因む地名が残る。
- 2、飛鳥・藤原の宮都の研究：江戸時代に始まる。本居宣長(18世紀)など。
 - 1) 発掘の開始：石舞台古墳の発掘(1933年)、藤原宮跡の大発掘(1934～43年)。
 - ①考古学史上、画期的な発掘：考古学・古代史学・文学・建築学・美術史学などを総合した飛鳥・藤原の宮都の解明(飛鳥学)が始まる。
 - ②以来80余年：戦中戦後の混乱期を除けば、毎年、発掘調査が行われている。
 - ③昭和44年(1969)：奈文研が継続発掘調査を開始。国家的事業として飛鳥の解明・保存事業を推進。毎日、飛鳥・藤原のどこかで発掘調査が続けられている。
 - 2) 発掘成果：多大。古代史を塗り替える大きな成果は枚挙するに暇がない。
 - ①高松塚古墳壁画の発見(1972年)：以来、成果が報道に大きく取り上げられ続ける
 - ②木簡の発見：『日本書紀』からは知り得ない歴史の具体像を蘇らせる。
 - ③研究：様々の課題へと範囲を広げ、かつ深化をとげ、世界に誇り得る研究が展開→「歴史を発掘する時代」が到来。
 - ④発掘面積：数%。手つかずの地域も広い。多くの謎を秘める。
 - ⑤飛鳥・藤原の地：「古代史の無尽蔵の宝庫」。
 - ⑥発掘の進展により：歴史の舞台の実像や歴史像は絶え間なく構成し直されていく
- 3、古墳文化の変容、衰退、終焉：
 - 1) 推古朝：前方後円墳の築造が終焉。天皇陵などに中国系の方墳を採用し、急激に小型化(天皇陵約60m)。→推古朝の葬制改革。全国に及ぶ。
 - 2) 舒明天皇没後：天皇陵に八角形墳を採用。8世紀初頭の文武天皇陵まで継承。
 - 3) 7世紀前半の横穴式石室：6世紀以来の自然石積み。巨大横穴式石室を築く。
 - ①7世紀中頃：巨大な切石を積んだ横穴式石室を採用。やがて小型化。

②石室内に家形石棺を安置：6世紀以来の風習を引き継ぐ。

- 4) 7世紀後半以降：横穴式石槨(石棺式石室)が主流化。遺体を木棺や漆塗棺に納めて石槨内に運び入れるようになる。副葬品僅少(装身具程度、唐製品が加わる)
 - 5) 中尾山古墳：横穴式石槨の中に火葬骨壺を納める。古墳は消滅へと向かう。
 - 6) 造墓思想：7世紀初頭頃、風水思想に基づく造墓が始まる。7世紀後半には定着。
 - 7) 7世紀中頃以降：檜隈・真弓など飛鳥西南方の丘陵地が陵墓の地として固定。→飛鳥盆地内南部への歴代天皇の宮殿の固定化と相関。
 - 8) 墳形、石室構造、造墓思想、壁画：東アジアの影響を受けつつ古墳は変質・衰退
- 4、飛鳥の宮殿構造の変容、京の成立：
 - 1) 宮殿構造の整備過程：大王(天皇)権力の動向、行政機構や官僚制の整備、展開と相関。内裏と朝庭・朝堂からなる宮殿から、官衙を付設する宮殿へ。
 - 2) 推古天皇の小墾田宮：南に朝堂・朝庭の一郭、北に大殿(内裏)の一郭が連なる。
 - ①宮殿の中核部の構造：後の本格的宮殿に継承される基本型が成立。
 - 3) 舒明2年(630)：飛鳥盆地南部に飛鳥岡本宮を営む。以降、「飛鳥」に諸宮が定着。
 - ①舒明11年(639)：百濟大宮を百濟川のほとりに(磐余の地)に造営。壮大な宮殿。
 - ②舒明朝：百濟大宮と最初の天皇発願の寺院百濟大寺を造営、八角形墳を創出。→「天皇」の絶対化が進展。舒明天皇時代の歴史的意義の再評価が必要。
 - 4) 乙巳の変後の孝徳天皇の難波長柄堂碁宮：朝堂院・内裏の構造が整い、中核施設の東西に官衙を配置する機能的な大規模宮殿(46カ)が成立。画期的宮殿。
 - 5) 飛鳥還都後の斉明天皇の後飛鳥岡本宮：飛鳥宮上層遺跡。
 - ①構造：内郭(内裏)と外郭を中心に構成。内郭は3棟の正殿を南北に連ねる構造。
 - 6) 天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮：後飛鳥岡本宮を利用しつつ、改造。
 - ①内郭の東南方：エビノコ大殿を新建。『日本書紀』に「大極殿」とある建物。
 - 7) 飛鳥の宮殿の特徴：すべて伝統的な掘立柱建物。石敷舗装・石組溝を多用。
 - 8) 7世紀中頃以降：官司制・官僚制・官位制の整備が進む。官人層が増大。
 - ①官司制の整備：政治実務を執る官衙が多く設けられるようになる。
 - ②官衙：狭い飛鳥盆地。天皇宮殿内のほか、飛鳥盆地内の各所にも分散して配置。
 - ③官衙的施設の遺跡：斉明6年(660)、皇太子中大兄皇子初造の漏刻台跡(水落遺跡)、服属儀礼施設(石神遺跡、飛鳥寺西広場)、天皇祭祀・儀礼施設(酒船石遺跡)、官営工房(飛鳥池遺跡)、天武朝の民官(雷丘付近)など。
 - ④7世紀中頃以降の飛鳥盆地：宮殿・付属施設・官衙、大寺などで埋め尽くされる
 - ⑤盆地縁辺の傾斜地・山間地：皇子宮や有力豪族層の邸宅、氏寺が構えられる。
 - (a)山田寺と山田家、大原の藤原氏の居宅、飛鳥稻淵宮殿跡、甘樞丘上の邸宅など
 - 9) 盆地外、後の藤原宮地の周辺：皇子宮や官人層の居宅が設けられる。
 - ①天武天皇の皇子宮：高市皇子の香来山宮、穂積皇子の宮、大津皇子の訳語田舎。
 - 10) 斉明5年(659)条「京内諸寺に孟蘭盆経をとかしめ」：飛鳥に「京」(特別行政区)が成立していたことを示す最初の記事。都市的景観が成立。
 - ①以降：『日本書紀』に「倭京」(壬申の乱)、「京師」(天武朝)が頻出。「軽市」が存続
 - ②藤原宮下層、薬師寺下層など：条坊道路、街区を検出。「倭京」に伴うもの。
 - ③京の構造：下ツ道・上ツ道・横大路など7世紀初頭以来の基幹道路が骨格となる
 - 5、新たな宗教・思想・文化・知識・技術の受容・展開：
 - 1) 仏教と道教、儒教思想の導入・展開：新時代を作り上げる原動力で、その象徴。
 - ①仏教の公伝：538年。百濟聖明王が伝える。蘇我対物部の崇仏廃仏を巡る争い。
 - 2) 本格的寺院・飛鳥寺の造営：588年。仏教は本格的な歩みを始める。
 - ①造営：百濟が造寺工らを派遣。渡来人が深く関与。百濟・高句麗の両要素。
 - 3) 推古朝以降：寺院の造営が急増。推古32年(624)、46カ寺が存在。
 - ①寺院：宗教・思想のみでなく、新たな学術・文化・知識・技術などの集積の場。文明開化の象徴・拠点。文化の殿堂。古墳に代わる新しい権威・文化の象徴。

- ②天武朝の飛鳥：24ヵ寺が壯観を競い、異国情緒豊かな仏教文化が花開く。
 ③持統6年(692)：全国に545ヵ寺(『扶桑略記』)。群馬・栃木～大分・熊本に分布
 4) 初期仏教・寺院の特徴：蘇我氏主導。氏寺。百済様式主流(伽藍配置、軒瓦など)
 5) 天皇発願の最初の寺院：舒明11年(639)、百済大寺を造営。九重塔を建立。
 ①百済大寺(吉備池麿寺)の塔・金堂、回廊範囲：破格の規模。諸寺を大きく凌駕。
 ②九重塔の造営：東アジア諸国の国寺での鎮護国家思想に倣ったもの。
 ③百済大寺：鎮護国家仏教、仏教国教化への出発点。
 ④九重塔：国家筆頭大寺の象徴。天武朝大官大寺、文武朝大官大寺へと継承。
 6) 鎮護国家仏教への歩み：天武・持統朝に明確化。京・畿内・諸国で鎮護国家の根本経典である仁王経・金光明経の誦経を命じる。
 ①飛鳥三大寺制の成立：天武9年(675)。大官大寺・川原寺・飛鳥寺。国家による仏教・僧尼の統制。
 ②藤原京四大寺：文武朝大官大寺(左京)・薬師寺(右京)・川原寺・飛鳥寺。
 ③諸国の評(郡)：「評(郡)家」とともに、「評(郡)寺」を建立。
 7) 伽藍配置の変遷：高句麗式→百済式→法隆寺式(塔・金堂並列式)→唐様式の複弁蓮華文軒瓦を採用(川原寺)→薬師寺式(双塔式)・大官大寺式(回廊内一塔式)。
- 6、道教的思想・陰陽五行説の受容：6世紀後半に本格的に導入。
 1) 欽明朝：百済から易博士・曆博士らが交替で来日。卜書・曆本を送ってくる。
 2) 敏達6年(577)：百済王が仏教関係者とともに呪禁師を送ってくる。
 3) 推古10年(602)：百済僧の観勒が「曆本・天文地理書・遁甲方術の書を貢る」。
 ①観勒：各分野で後身の教導にあたる。
 4) 道教的思想：7世紀中頃以降、仏教とともに、政治を牽引する思想として浸透。文明化を推し進める大きな原動力となっていく。
 5) 道教的思想の現れ：天皇称号、八角形陵、大極殿、四神図、星宿図・日月像など
 ①道教的呪具：斎串・人形(祓具)・土馬など。7世紀後半以降、定着。
 ②道教的な雨乞い：稲淵山で四方拝(皇極天皇)、牛馬の屠殺、市を閉鎖して祈雨。
 ③高松塚・キトラ古墳の四神、星宿・日月図：道教、陰陽五行説に基づくもの。
 6) 伝統的な自然崇拝：山岳・河神・聖樹などへの崇拝・神祭りも色濃い。
 7、中国系科学技術：斉明・天智朝に大きく展開。遣唐使派遣の最盛期。
 1) 医療・食生活：漢法の医療・医薬。大陸系食器(金属器・箸)・食品の出現と普及

D、律令国家「日本国」の成立と藤原宮・新益京の建設

- 1、7世紀後半以降：100年間の模索を経て、律令国家「日本国」が作り上げられる。
 1) 天武朝：日本国号・天皇称号、飛鳥浄御原令の編纂開始、官司・官僚制や官寺制の整備、伊勢神宮式年遷宮・斎宮制、記紀の編纂開始など画期的事業を推進。
 ①天武天皇が目指す律令国家：その政治の中心舞台としては飛鳥は手狭。
 ②藤原宮と新益京：天武天皇が理想とする政治の中心舞台として建設を計画。
 ③藤原宮地の決定：天武13年(684)。建設は天武天皇の病と崩御によって頓挫。
 2) 藤原宮と京の本格的な建設開始：持統4年(690)の高市皇子の宮地視察に始まり、新益京や藤原宮の地鎮祭を経て、足掛け3年間をかけて建設。
 3) 藤原宮遷都：持統8年(694)12月に実現。古代中国の宮都の制度に学んだわが国最初の本格的宮殿と、条坊制都城が誕生。
 4) 藤原宮・新益京の建設と浄御原令の編纂：天武天皇の政治改革路線によるもの。
 ①持統天皇にとって：両事業は天武天皇の遺志の実現。
 2、藤原宮：律令国家の政治の中心舞台。中国式宮殿にならった初めての本格的宮殿。
 1) 巨大宮殿：1km四方。大垣・外濠で囲む。宮城12門。総面積約84%。
 ①構造：中央に南から北へ朝堂院・大極殿院、内裏が並び、これらの東西を中央官庁域(六官・八省)に充てる。→諸施設を一体的に集約した機能的大宮殿が成立
 2) 建築構造：初めて礎石瓦葺きの大陸様式の宮殿を採用。恒久的宮殿をめざす。

- 3) 本格的な大極殿が出現：天皇の政治・儀式の正殿。藤原宮の最重要の殿舎。
 4) 飛鳥諸宮との比較：面積・構造ともに大きく飛躍を画した画期的な宮殿。
 ①藤原宮：平城宮以降の宮殿へ引き継がれる基本形が成立。
 3、都城「新益京」の誕生：東西・南北に街路を通して街区を整然と区画したわが国最初の条坊制都城が成立。街区は飛鳥時代以来の地名で呼ぶ(浦坊、小治町)。
 1) 新益京の構造：南北10条、東西10坊、10里(5,3³)四方の京城。中央に藤原宮。
 ①『周礼』考工記記載の理想の都城を具現したとする説：定説化。計画性を強調。
 2) 「周礼型都城」説では説明しきれない点がある：課題が少なくない。
 ①大和三山に囲まれた藤原宮・京：道教・陰陽五行説に基づく永遠の理想の地。
 ②斉明朝以来の京や倭京・新城との関係：藤原宮や京、薬師寺の下層などで発見されている条坊道路や、宅地の区画・建物群など前身遺構との関係は如何に。
 ③7世紀初頭以来の幹線道路(下ツ道・中ツ道・上ツ道・横大路)が骨格となること
 ④大官大寺と薬師寺を京内の東西に対置していること：唐長安城の影響。
 4、最近の大きな成果：藤原宮大極殿院正門前で7本の幢竿跡を発見。
 1) 文武5年(701)：体系法典の「大宝律令」が完成。
 ①同年3月：初めて「大宝」の元号が立てられ、30年ぶりに遣唐使派遣が決定。
 2) この年の元旦朝賀の儀式：律令国家の誕生を祝うかのごとく盛大。
 ①『続日本紀』文武5年(大宝元年)正月朔日条：「天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹鳥形幢、左日像青竜朱雀幡、右月像玄武白虎幡、蕃夷使者陳列左右、文物之儀於是備矣」。→中央に銅鳥幢、東西に四神・日月像の幢幡を立てて儀式を行う
 ②元旦朝賀の儀式：天皇が貴族や臣下から年賀を受け、君主と臣下との関係、天皇の大権を確認する国家最重要の儀式。天皇の即位式と並ぶ「大儀」。
 3) 大宝元年3月：大宝律令が完成。政治の根幹となる律令を作り上げた画期的な年
 ①天皇を頂点とする律令制による中央集権国家：律令編纂、律令に基づく中央・地方の政治・社会組織、天皇称号、儀式、元号制などが整備され、
 ②それと共に：新しい政治を行う舞台として、大陸様式の宮殿建築や大極殿を採用した本格的宮殿の藤原宮と、都城が揃うことで確立へと向う。
 ③大宝元年：本格的宮殿と都城を完成させ、律令法典を作り上げた画期的な年。
 4) 「文物の儀、是に備れり」：文物(儀式・威儀、学術・芸術、法律に関わる)の制度がここに至ってすべて整った。→新時代の幕開けを高らかに宣言。
 5) 令制：元旦朝賀と即位の「大儀」では、大極殿前に7本の宝幢を立てることを規定
 ①『延喜式』(927年)：元旦朝賀、即位の「大儀」では幢幡を立てることを規定。
 ②「文安御即位調度之図」(1444年)：即位式で立てる7本の宝幢の様子を描く。
 ③平城宮後期大極殿の前庭：桓武天皇即位時の幢竿支柱跡7ヵ所を発見。
 6) 藤原宮大極殿院南門前発見の幢竿跡：大宝元年、元旦朝賀の儀式で立てた幢竿跡
 5、大極殿前に7本の宝幢を立てて行う大儀：道教、陰陽五行説に基づくもの。
 1) 天子・天皇：父である天帝(天界の絶対神)の子として、天帝の命を受けて地上の統治を代行する。天皇称号は道教の最高神「天皇大帝」(天帝)からとったもの。
 2) 「太極殿(たいきょくでん)」・「大極殿」：天帝が常居とする北極星(太極星)に基づく呼称
 ①「太極殿」：魏の王宮や唐長安城での皇帝政治の正殿の呼名。
 3) 天子・天皇の宮殿：北極星を中心とした天上界の宮殿を地上に再現したもの。
 ①天子・天皇：天帝の命を受けて、天帝の常居である太極星に擬えた大極殿で国家最重要の政治儀式を行う。→道教、陰陽五行説の政治思想に基づくもの。
 4) 「文明化」とは：古代中国の道教・陰陽五行説の政治思想を重要な根幹として、国家を作り上げ、新文化を高揚させていくことであった。
 6、高松塚・キトラ古墳の四神図(28宿の星座)・天文図(星宿図)・日月像の壁画：元旦朝賀の儀式や即位儀式で大極殿前に立てる7本の宝幢と同じ内容のもの。
 1) 天文図(星宿図)の中心：北極五星など北極星座群を描く。天帝の居所の星座。
 2) 壁画：「日本国」が飛鳥・藤原の地で確立した頃を目に見える形で物語る。